

# 平成27年度 事業報告書

指定特定施設入所者生活介護事業所 大慈吉祥園

## 1. 《平成27年度法人ヴィジョン》

- ①経営の強化
- ②サービスの質の向上
- ③教育システムの充実

## 2. 《基本方針》

介護を提供するプロとしての意識を十分に持ち、要介護者等の心身の特性を踏まえて、その有する能力に応じ、自立した“安心・安全な生活”を営むことができるよう生活全般に渡る援助を行う。関係市町村、地域の保険・医療・福祉サービス機関との綿密な連携を図り、総合的なサービスの提供に努める。

## 3. 《長期目標》

- ①ゲストに安心・安全・清潔・安らぎのある環境を提供する
- ②職員は法令を順守し、人としての尊厳を守り、敬愛の念をもって行動する

## 4. 《中期目標》

接遇No.1を目指す

## 5. 《年度目標》

### ①情報の共有を徹底させる

#### A) 報連相の徹底を図る（迅速・細心・正確）

- ・その場でメモを取る習慣をつける
- ・報連相のルールと仕組み作り
- ・報連相自己チェックシート作成、2か月毎に職員間で検証する

情報の共有に関しては情報共有担当チームを作り、月1回の会議を通して日々取り組んできた。共有すべきことは全て共有できるような仕組みを作り、改善してきている。3日以上申し送り、自己チェックシートを作り定期的に共有できているかを確認するなど細かくやっており、現在も継続している。報連相に関しては、上半期、職員個々の意識の差があった。申し送り忘れ・記録のし忘れなどがあり、実際に共有できていなかったなどの反省があげられる。記録に関しても職員個々の差が顕著に出ており、「いつ」「誰が」見ても分かる記録のレベルには至っていない。既に始めているが、次年度は、サービス提供の際の「支援の証」を確実に残す、「いつ」「誰が」見ても分かる記録を残せるようなレベルまで進めて行きたい。

### ②人材育成の強化

#### A) 手順書に沿って、業務が確実・丁寧に出来るように指導・監督する

- ・業務手順書の整備
- ・手順書の周知徹底と活用
- ・手順書を見直す仕組み作り

#### B) 接遇・コミュニケーションスキルの研修を定期的に実施する

- C) 笑顔・挨拶・アイコンタクトを常に意識付ける  
 ・朝のミーティング時に全員で復唱する

手順書は完成させることができ、現在、職員に徹底させようとしている段階である。今年度は職員の異動等により、人員配置人数不足、また全体的に経験の浅い職員が多いという課題があり、個人的な人材育成というよりもチーム全体で学び合うこと、基本的な体制を整えることに重点をおいて進めてきた。手順書に関しては完成し、現在、職員に徹底させようとしている段階である。マナーや接遇に関しても徐々に向上が見られている。2ヶ月に1回、自己・フロアチェックシートを活用し、皆で話し合う機会を設けた。職員全員がチームの問題としていくことがマナーの向上、不適切ケアをも無くしていくと考えている。話し合い、意識付けしていくことで自分が発した言葉や行動を振り返る習慣が付いてきた。また、課題の多いゲストについても皆で話し合い、思いを共有することで職員個々のストレスが軽減されるようにしている。専門的知識や技術面では各自が外部研修に行つて学んだ内容を会議などでミニ研修をし、2ヶ月に1回、理学療法士（ケアハウス）の研修を受けている。若いチームでもあるため、専門職としてまだまだ課題は沢山あるが、基本的な土台は整ってきていると考える。次年度は専門性を高めるべく個人・全体の育成を強化していきたい。

6. <<職員体制>>

管理者1名 介護支援専門員1名 支援員6名

★要介護度状況 平均要介護度→1.86（男女平均） H28年3月末現在

項目	男	女	計
その他（非該当）	4	6	10
要支援1	1	2	3
要支援2	2	4	6
要介護度1	3	19	22
要介護度2	7	12	19
要介護度3	3	3	6
要介護度4	1	2	3
要介護度5	1	0	1
合計	22名	48名	70名

7. <<事業の実施地域>>

養護老人ホーム大慈吉祥園内とする。

8. <<相談・苦情の対応>>

養護老人ホーム大慈吉祥園に準ずる。

9. <<関連機関との連携>>

当施設内他事業所、関係市町村、地域の保健・医療・福祉サービスとの綿密な連携を図り、総合的なサービスの提供に努める。

10. <<個別援助計画>>

ゲストの心身の特性を踏まえてその有する能力に応じ、自立した日常生活ができるよう、

ゲスト及びご家族と相談し、計画書を作成する。作成後は援助計画を実施、必要があれば変更していく。

#### 1 1. <<総括>>

上半期はゲスト個々のニーズに対して、サービスが過剰になりがちになった事で、共有することが増えた。日々、細かく変化する情報についていけないなどが職員の負担となった。細かく過剰なサービスにより、業務改善をしても職員の負担軽減には繋がらず、ゲストへの見守りやレク・生活リハビリの時間が取りにくい状況があった。

下半期は、申し送り時にこまめに話し合いをもった。その結果、日常生活においてゲストができること、できないことを観察し、共有することで徐々にモニタリングができるようになり結果、効率良く生活の中でリハビリを再開できるようにもなった。また、情報の共有という事では、記録の仕方において課題が残った。サービス提供の記録忘れ、ケース記録や事故報告書等の経過記録物全般の完成度、ゲスト・家族様との連絡事項、申し送り事項、文章力等において職員個々の差が出ており、統一が図れていない状態がある。

次年度は、「記録」について一定のルール化を図り部署内で共有させるなど、「いつ」「誰が」見ても分かる記録、リスクマネジメントを意識した介護記録ができるように改善していきたい。